

令和6年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
301	川崎市立 聾学校	中野 理佳

学校教育目標	今年度の重点目標
1 豊かな言語力と確かな基礎学力 2 自他ともに大切にできる心と自主的に行動する力 3 心身ともに健康で、社会を生きぬく力	1 自己選択、自己決定ができる場を設定し、互いに認め合う様々な体験を通して自己実現力、自己肯定感を高める。 2 川崎市研究推進校本発表に向けた研究の推進及び、取り組みを通して聾教育のあり方等を理解・共有し、専門性の向上を図る。 3 GIGA端末の有効な活用方法等を探り、個々に応じた豊かな教育につなげる。 4 校内の情報保障環境についてのあり方を考え、教職員の共通理解を深める。 5 地域の関係機関等との連携を強化し、センター校として川崎市全体の聾難聴児支援の役割を果たす。また、地域支援力のさらなる向上をはかる。 6 異学年交流、学校間交流、居住地校交流等の交流活動を推進し、幼児児童生徒の社会で生き抜く力につなげる。

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
1	自己選択、自己決定ができる場を設定し、互いに認め合う様々な体験を通して自己実現力、自己肯定感を高める。 ・幼児児童生徒の自己肯定感を高めるため、体験的活動を多く取り入れて行くこと、授業内での発表、行事等で一人一人が活躍し、賞賛を受ける場の設定を行って行くことを全教職員で確認 ・企業のワークショップや児童生徒の企画によるイベントなどの体験活動を増やす。	・目に見える体験をすることで、より積極的に活動に参加する様子が見られた。 ・児童生徒が主体となって企画、運営することも増えてきた。学校教育推進会議での提案も、要望だけでなく、自分たちで取り組みたいことを宣言し、自分たちで実現しようとする姿勢が高まった。 ・全体的には児童生徒が自信を持ち、より積極的に行動する姿勢が育ってきたと感じられるが、個々においても、もっと着目し、自己肯定感を育てていく必要がある。	・幼児児童生徒の自己肯定感を高める体験的な学習を多く取り入れるためには、教職員の様々な工夫とともに、関係者や関係団体とのつながりも非常に重要なものとなるので、つなぐ役割を校長として積極的に行っていきたい。 ・個々において活躍できる場を取り入れていくことはもちろんのこと、家庭とも連携して、称賛される場を多く設定していく。
2	川崎市研究推進校本発表に向けた研究の推進及び、取り組みを通して聾教育のあり方等を理解・共有し、専門性の向上を図る。 ・各部の研究推進 ・各部相互の研究内容の情報交換を行うため、校内でプレ発表会の実施 ・授業研究の推進 ・初任・新着任の教員は他学部の研究会にも参加	・各部の研究において、講師から助言を受けながら、幼児児童生徒につけたい力、手立て、聾教育のあり方などについて授業研究や、議論を重ね、専門性を向上させることができた。 ・聾教育だけでなく小中の教科研究会への参加、教科の指導主事からの授業指導も受けた。 ・豊かな言語力と確かな基礎学力を、育てていくには、聾教育の専門性、各教科指導の専門性双方が必要である。教職員が入れ替わる中でどのように専門性を継承し、人材を育成していくかが課題である。	・他学部の研究会への参加や授業を見合うための授業体制を作る。 ・研究会の講師の話を教員のクラスルームに上げるなどして、情報がより詳しく共有できるようにする。 ・聴覚障害の専門性だけでなく教科指導の専門性を同時に向上するため、小学校、中学校の研究会への参加も積極的に推進し、カリキュラムセンターの教科の指導主事とも連携を図る。
3	GIGA端末の有効な活用方法等を探り、個々に応じた豊かな教育につなげる。 ・GIGA端末を活用しての話し合い活動など、積極的に活用する。 ・GIGA端末を使った視覚資料の提示 ・GIGA端末を使った授業改善 ・コミュニケーションツールとしてのGIGA端末	・GIGA端末を積極的に活用することにより、わかりやすい授業等ができるようになってきたのと同時にコミュニケーションのツールとしても活用されるようになってきた。しかし、直接的なコミュニケーションも大切なので、その活用法、バランスなどをさらに考えていく必要がある。 ・家庭でのGIGA端末の扱いについての課題もある。	・さらに深い学びにつなげるために、児童生徒の探求心を高めるような活用を目指す。 ・どのようなアプリが有効か、GIGA端末のiPadとパソコンとを併用し、それぞれを児童生徒のつけたい力に合わせて活用していく。

4	校内の情報保障環境についてのあり方を考え、教職員の共通理解を深める。	<ul style="list-style-type: none"> 口話、手話等多様な手段を使った校内コミュニケーションの推進 手話研修会、朝の打ち合わせにおける、ワンポイント手話、手話動画の配信等、教職員、幼児、児童生徒の手話力向上のための取り組み コミュニケーションマナー研修の実施 	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションマナー研修において、それぞれの立場に立って、相手の気持ちを考えながらコミュニケーションのルールを考えることができた。 聾の教員等が中心となり、手話の推進活動を行うことができた。聞こえない聞こえにくい幼児児童生徒教員がいる環境で、手話を中心にお互いに様々なコミュニケーション手段を使い、みんなに伝わる工夫をしようと呼びかけている。 毎年度、新着人の教員のコミュニケーション手段の習得が課題である。 	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き聾の教員を中心に推進活動を進めていく。 聴覚障害の幼児児童生徒への伝え方、伝わっているかの確認等教職員全体で確認する。 日常の会話においても、常に聾者が共にいることを意識し、お互いのコミュニケーション能力を向上できるように協力し合う。 資料を見ながらの説明などは、資料を見る時間の確保や初めての情報についてはゆっくり説明する必要があるなど具体的な確認もしていく。
5	地域の関係機関等との連携を強化し、センター校として川崎市全体の聾難聴児支援の役割を果たす。また、地域支援力のさらなる向上をはかる。	<ul style="list-style-type: none"> 乳幼児相談の充実 教育相談を受けた聴覚障害児が通園する、保育園、幼稚園との連携 障害理解授業の充実と活発な交流 聴覚障害教育のセンター校としての役割 地域や企業との連携 	<ul style="list-style-type: none"> 通級の児童生徒数や相談の要請なども増えてきた。より、地域から必要とされていることを感じる。 保育園や幼稚園からも要請を受け、引継ぎや障害についての認知活動を行い連携を深めることができた。また、連携を深めていこうとする動きが幼稚園や保育園に浸透しつつある。 聴覚障害の子どもたちは気付きにくい困り感を持っていることが多く、聴覚障害についての理解をさらに進めていく必要がある 	<ul style="list-style-type: none"> 川崎市全域の小中学校を中心に、きこえについての相談をうけたり、聞こえにくいことに対する困り感などを共有していく 川崎市聴覚障害児支援中隔機能事業が始まったことを受け早期からの切れ目のない支援につなげていくために、関係機関との連携をより密にしていく。 増加するST派遣依頼への対応を検討し、支援の充実を図る。 川崎市の聴覚障害教育のセンター校としての役割をさらに充実できるように、理解活動を進めていく。
6	異学年交流、学校間交流、居住地校交流等の交流活動を推進し、幼児児童生徒の社会で生き抜く力につなげる。	<ul style="list-style-type: none"> 居住地校交流の推進 学校間交流の推進 異学年交流の推進 	<ul style="list-style-type: none"> 近隣校との交流だけでなく、オンラインで他県の聾学校と交流をするなど、交流の幅が広がった。また、全校交流会などは生徒主導で行われた。 居住地校交流では、障害理解授業を行ったり、回を重ねたりすることで、スムーズに交流ができるようになってきた。 近隣保育園との交流を再開することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 交流をさらに広げていきたいとの児童生徒の要望がある。特に学校間交流を行っていない高等部からは、同じ敷地内にある、中央支援学校分教室との交流や近隣の高等学校との交流を望む声がかかるので、検討していく。
7	業務改善 働き方改革	<ul style="list-style-type: none"> GIGA端末の活用、事前の会議資料配布 会議等の精選 月に1～2度のワークライフバランスデー(ノー残業デー)の設定 手話通訳配置に合わせた会議計画 	<ul style="list-style-type: none"> 手話通訳が4人そろったことにより、会議計画が立てやすくなった。 GIGA端末での会議資料の事前配布で、効率化を図ると共に、部会、総務委員会の位置づけを確認することで、各々の意見をどのように反映させるかが以前より明確になった。 お互い声を掛け合い、意識することで帰宅時間が早くなり、残業時間を減らすことができた。 家庭訪問期間や面談期間、成績処理などの時期には、時間外の労働が多くなってしまいがちである。 	<ul style="list-style-type: none"> 遅くなりそうな職員には声をかけ、お互いの退勤意識を高め合えるようにする。 研修会の持ち方や精選について協議をしていく。 家庭訪問期間や面談期間、成績処理の時期などに作業時間を確保するため、会議や研修を入れない、授業時数の確認を行い、授業短縮等による時間確保ができないか等を検討する。

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
<p>学校評価アンケートで、「とてもそう思う」「そう思う」を合わせて、「体験活動が充実し、楽しい学校生活となっている」が、保護者95%、教職員97%、児童生徒においても、「体験活動(学校行事)がたくさんあって楽しい学校である」が94%で昨年度からの伸び率も高い。今年度の重点目標の一つである体験的活動を多く取り入れることを目指した項目で高い評価をいただくことができた。また、児童生徒の「授業中、先生は丁寧にわかりやすく教えてくれる」が100%、という結果はうれしい限りである。</p> <p>各項目、60%以下はなく、一定の評価をいただけたと思うが、今年度は、年度内に2回の個人情報所在不明案件があり、自由記述欄では、厳しいご意見も多くいただいた。指摘された点については真摯に受け止め、徹底した情報管理を行っていききたい。</p>	<p>今年度、学校教育目標を変更して2年目。推進校としての研究を行ったこともあり、各学部の教育目標、研究テーマなど、学校教育目標を意識し、教職員が同じ方向を目指すことができたと感じる。また、体験的な活動は、幼児児童生徒が自己実現を感じられる場であり、その場を多く設定できたことは、自己肯定感を高めることにつながっていると思われる。今後、幼児児童生徒の個々に焦点をあて、さらに自己選択、自己決定ができる場、お互いに認め合える場の設定を行っていききたい。</p> <p>教職員からは周りから助けられて気持ちよく仕事ができているという話を多く聞いたり、教員間で、教育について語り合う場面を随所に見たりすることができた。しかし、個人情報所在不明となることが2回も起き、しかも、誰かの故意によるものであろうとのことで、幼児児童生徒、保護者に多大な不安を抱かせてしまったことは誠に申し訳なく思っている。今後、二度とこのようなことが起こらないように気持ちを引き締め、信頼を回復するとともに、よりよい教育のために尽力したい。</p>